

開催地名	兵庫県小野市
開催日時	令和5年8月27日（日） 9:10 ～ 10:40
開催場所	小野市伝統産業会館
語り部	京 英次郎 （宮城県塩釜市）
参加者	自主防災組織のリーダー等 249 名
開催経緯	近年の異常気象により、全国各地で豪雨災害が頻発化激甚化する状況下、また南海トラフ巨大地震の今後 30 年以内の発生確率が 80%という中で、市民の防災に対する意識を変革し、自助共助の意識高めていく必要がある。 また、市民の中から地域防災の推進者となる防災リーダーを育成していくことが重要であり、今回、自主防災組織のリーダー等を対象に講演をしていただいた。
内容	【災害時、命を守るのは普段からの自助・共助～東日本大震災から学ぶ～】 （１） 防災意識を高める 会場内の防災士に問う。温泉の話（趣味・娯楽）と防災の話であればどちらを聞きたいか。7割以上（全体 200 名）が温泉の話に手を挙げた。これは決して間違っていることではない。では、どうして防災の話は選ばれないのだろうか。それは、災害のイメージがすぐに思い描けないからだ。年に何度も被災される方はほとんどいない。小野市で考えれば、津波のリスクもなく、防災について毎日考え生きている人はいないだろう。だがこのままでは、災害が起きた際に、被害にあう可能性が高いだろう。 東日本大震災では約 2 万人の方が命を落とした。極端な話、亡くなった方の話を聞くことができれば、防災へのイメージは自ずと変わるだろう。しかしそれは不可能である。だからこそ、被災者の経験談や防災に対する知識を知るのが今、この時間である。私たちは、これからも生きるために考え続けなければならない。考えるのは、過去のことではなく未来のことだ。 （２） 東日本大震災と宮城県沖地震 『津波のリスクがないから』『大きい地震に直面したことがないから』知らなくてもいいのか。これは間違っている。長い人生の中で、海付近に出掛けることもあれば、家族・友人が海の近くに住むかもしれない。被災した際に、無知であることは、命を落とすことに繋がりがかねない。災害には、様々な種類があるが、地震における知識は様々な防災に役に立つ。

1968 年宮崎県沖地震が発生した。この地震でも、たくさんの犠牲者が出た。この地震と東日本大震災を比較すると見えてきたのが、震災における被災者（死亡、重傷、軽傷含む）が減っているということだ。これは市民全体が、地震が来ることをわかっていたからだ。宮城県では、30 年から 45 年の間隔で大きな地震が来ている為、防災訓練や日頃から備えることができていたのだ。

あらかじめ備えることができた人と、そうでない人では、地震が来た際の初動体制が変わってくる。この、初動体制こそがその後の避難に大きく関わる。災害時に間違った行動をすると、命を落とすこともある。

（３） 地震発生時の行動パターン

具体的に、どのような初動体制（揺れる始めて 1 分間）を取ればいいのか。それは下記の通りだ。

- ・火の始末を素早くする
- ・ドア、窓を開けて脱出口を確保する
- ・転倒の恐れがある家具から離れ、机などの下で身を隠す
- ・慌てて外に飛び出さない

この 4 つ以外にも、大切なことが一つある。それは自分を最優先に考え、身を守ることだ。人を助ける前に、自分が無事でなければ助けられる命も助けられない。これは、消防団員も同じで、救助要請が入り現場に駆け付けた際、何よりも先に行うのが安全確認だ。自分の身は自分で守らなければならない。

（４） 便利な世の中と、そのリスク

我々はとても便利な世の中で生きている。だが災害時は当たり前のように使えていた便利なものが使えない場合が多い。普段から便利が日常化してしまっている私たちにとってリスクを考える人はほとんどいないだろう。東日本大震災で起きた一例は、エレベーターが停止してしまい老人の上り下りが不便になったことだ。上り下りであれば命に危険があるわけではないが、多くの人が中に閉じ込められてしまったのだ。いたるところで、エレベーター内に閉じ込められてしまった為、業者が駆け付けるのにかなりの時間が掛かってしまった。エレベーター内には食料・飲料水はなくトイレもない。ほとんどの人がパニックになった。エレベーターだけではなく、携帯電話、車など様々なものにリスクはついてくる。いざという時パニックにならないためには、そのリスク（特に使えなくなった時）を考えながら生活することが大切である。

普段の暮らしを奪われる、避難所生活でもパニックは起こる。ここでの対策は、リス

クを知ることだけでは防ぐことはできない。避難してくる方は、被害者意識でやってくる。よって、自分本位な考えで行動してしまい、争いごとや、パニックが起こってしまうのだ。この意識を変えていかなければならない。避難所運営成功の鍵は団結力にある。例えば備蓄管理で例えると、運営が無理に備蓄を管理してしまうと、被害者意識を高めてしまう。避難者全員で備蓄を管理する（見える化）することで、団結力が生まれる。被災者意識を持たず、協力し合うことが大切である。

地域防災のリーダーは、例えて言う『忍者の心得』が必要である。武士のように人のために戦うのではなく、陰からサポートで自分の「命」を粗末にしない心得だ。そしてまた近いうち来る災害に備え、想定外を想定内にすることで、安心安全な防災を作り上げて欲しい。



開催地より

東日本大震災時の実体験に基づくお話しを楽しい方言や○×の参加型の研修により非常にわかりやすくご説明いただいた。アンケート結果によると、参加者は災害について具体的なイメージを認識でき、自助・共助の意識を向上することができました。

市としても、更なる防災活動を推進していくとともに、地域のつながりを重視した啓蒙活動に取り組みたい。